

腹部超音波検診について

腹部超音波検診とは？

プローブと呼ばれる装置から超音波を体内の臓器に送信し、戻ってきた超音波を検出器で受信、画像として描出します。検査する部位は肝臓、胆嚢、膵臓、脾臓、腎臓、腹部大動脈になります。

腹部超音波検診で何がわかるの？

肝臓では脂肪肝(図 1)、肝嚢胞、肝血管腫(図 2)、肝腫瘍、肝硬変などがわかります。脂肪肝は生活習慣病の予備群であり、高血圧、高脂血症、高尿酸血症、糖尿病になる前に見つけ、改善すべきものです。また、腹部超音波検診で肝腫瘍を見つけることが、その後のCTやMRI、血液検査等の精密検査によってがんであるかを判定する材料にもなります。肝臓は沈黙の臓器とも呼ばれ、病気があるにもかかわらず症状がないことが多く、非常に有用な検査の一つです。



図 1 (上の白い臓器が肝臓、
下が腎臓)

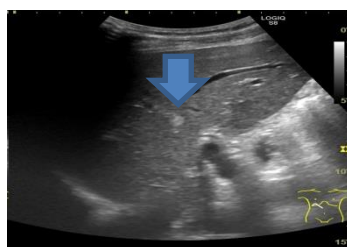


図 2 (矢印の白い所)

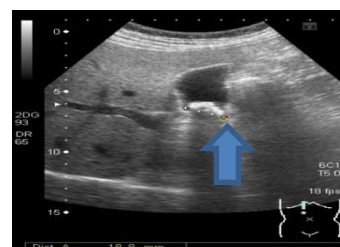


図 3 (矢印の白い所)

胆嚢では胆嚢ポリープや胆石(図 3)などがわかります。胆嚢ポリープは大きさが小さいものはあまり心配いりませんが、1cm以上の大きさになるとがんの可能性が高くなると言われています。胆石症では脂っこいものを食べると胆嚢から胆汁(肝臓で生成)が出て胆嚢が収縮し、胆嚢内に結石があると胆嚢壁が結石で圧排され、強い心窩部(みぞおち)痛や強い右側腹部痛が出ます。吐き気をもよおす方もいます。このような症状がある場合は内科や外科の医療機関を受診していただき、適切な処置をしてもらいます。

膵臓では膵嚢胞、膵管拡張、膵石、膵腫瘍等がわかります。ただ膵臓の位置が胃の後ろ側にあり、膵臓を描出するには困難なことが多く、超音波検査ではわかりにくいことが多い臓器になります。先程、超音波検査は超音波を体内の臓器にあて反射して戻ってきた臓器を画像として描出すると記載しましたが、空気が多い部分は超音波が通過するだけで戻ってこないため、画像になり

ません。体内臓器で言えば肺、胃、腸などは超音波検査が苦手なところですが。また骨も超音波が反射してしまい、骨より下に超音波が行かず苦手なところになります。脾臓は血糖値を調節する大切な臓器です。初期の脾臓がんでは自覚症状がないことが多く、かなり進行した状態で見つかった場合は手遅れになる事も多いです。生存率も低く、外科的手術の難易度も非常に高いため、背部痛などの自覚症状がある場合は内科、外科の医療機関に受診しましょう。

脾臓では脾腫、脾腫瘍などがわかります。肝硬変、右心不全、門脈圧亢進、感染症、腫瘍の転移や血液疾患で脾臓が腫大します。他の臓器と比べると腫瘍性疾患は少なめです。

腎臓では結石(図4)、嚢胞、慢性腎不全(図5)、腎腫瘍などがわかります。中でも腎結石は腎臓から尿管内に落ちて尿管が閉塞してしまうと、尿が腎臓内に逆流し、腎臓が腫れ激痛を伴います。吐き気をもよおす方もいます。腎臓は体内の老廃物を分解し、尿として排出する機能を持っていますが、この機能が損なわれるため全身に老廃物がまわり、尿毒症となり重篤な場合は生命にかかわるような深刻な状態になります。また、塩分過剰摂取等により慢性的に腎機能が低下してくると、人工透析が必要になってしまう方もいます。一度透析になってしまうと亡くなるまで続けなければ生きていけません。

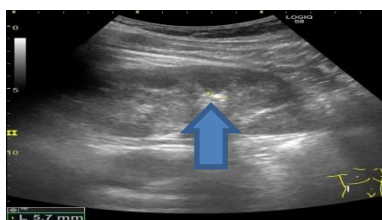


図 4 (矢印の白い所)

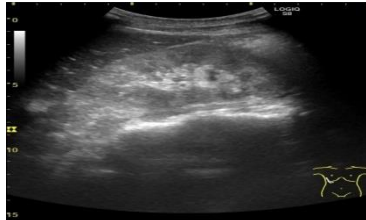


図 5 (元々肝臓と腎臓は同じ色ですが下の白い臓器が腎臓、上が肝臓)



腹部大動脈では腹部大動脈瘤などの血管の異常がわかります。腹部大動脈瘤は腹部大動脈壁の一部が脆弱化し、その部分が限局的に拡張する疾患です。腹部大動脈の直径は約 2cm ですが 3cm 以上に拡張した部位がある場合、その部分を腹部大動脈瘤といいます。体格がよく、腹部大動脈瘤までの位置が深い方や腸管内のガスが多い方などは大動脈自体の描出が困難な方もいらっしゃいます。

どのようにしたら腹部超音波検査検診を受けることができるの？

腹部超音波検診は健康管理センターにて行われています。一日、一泊ドックには検査項目として入っていますが、共済ドックや一般的な健康診断ではオプション検査となっています。

※一泊ドックのみ下腹部超音波検査(膀胱、男性:前立腺、女性:子宮、卵巣)を追加します。

当院健康管理センターで一日ドック、一泊ドック以外で検診希望の方は申込時にオプション検査を追加していただければ大丈夫です。放射線被ばくもなく簡易的で侵襲性のない、安価な検査です。熟練した知識と技術を持った診療放射線技師が担当します。また、近年女性の死亡率NO.5(2018年)の乳癌は若年層にも増えてきている疾患です。当院健康管理センターでは、女性に乳腺超音波検診(40歳以下推奨)+触診も行っております。40歳以上はマンモグラフィ2方向+触診、50歳以上はマンモグラフィ1方向+触診。早期発見、早期治療に備えてこちらの検査もぜひ受けてみてはいかがでしょうか？